

万年筆の旅

Vol.16



巻頭コラム

「万年筆からみた 吉村昭」

小池淳一（国立歴史民俗博物館教授）

CONTENTS



- トピック展示開催報告第11回 「吉村昭が描いた天狗党 —「動く牙」と「天狗争乱」福井の旅—
- トピック展示開催報告第12回 「吉村昭と万年筆」
- 友の会限定イベント開催報告 「万年筆で作家体験をしよう」
- WEB展示開催報告 「戦後75年 戦史の証言者たち —吉村昭が記録した戦争体験者の声—」

巻頭コラム 万年筆からみた吉村昭

小池 淳一

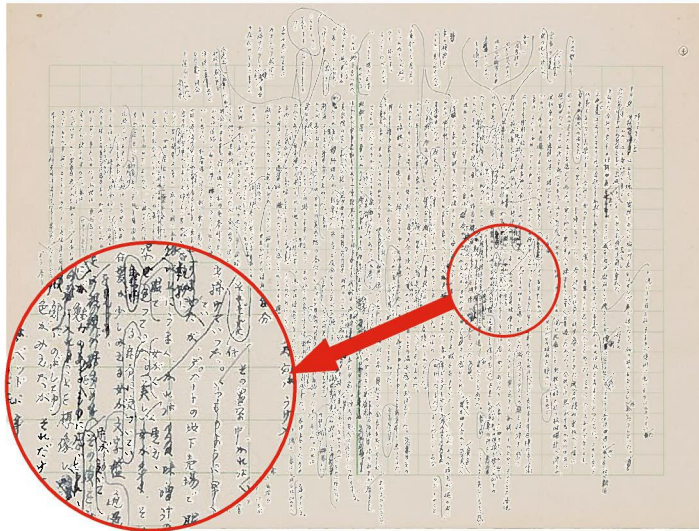
(国立歴史民俗博物館教授／民俗学)

「文学はつきつめた戦ひです。孤独に徹した仕事です」と吉村昭は、後に妻となる北原節子に宛てた手紙に書いた。これに続けて「机の前で万年筆を少しづつ動かしてゐる時間が僕の時間なのです」と記している。作家吉村昭の孤独に徹した仕事は常に万年筆とともにあった。

数多くの作品はそのほとんど全てが万年筆で書かれ、その筆致は遺された自筆原稿からうかがうことができる。比較的細字で丁寧に記された文字列は、

この作家の人間を見つめる、ためみのない執筆作業を彷彿とさせる。

吉村が用いた万年筆は、比較的硬いペン先で、細い文字が書けるものが多い。長時間にわたって文字を書き続けるにはあまり柔らかなペン先は不向きである。また、力を抜いて書くためには、太軸が好まれる傾向があるが、吉村の万年筆はそれほど太いものではない。これは吉村が、万年筆自体をやわらかく握り、手首や肘に負担をかけずに、たくさん文字を書く身のこなし



自筆原稿「秋の旅」草稿（津村節子氏寄託資料）

パイロットの細字を使用。原稿用紙1枚に10枚分を書きこんだ。下書きでは「ただ内から出てくるものを書き出すだけ」という。原稿をよく見ると、1マスに文字がびっしり詰まっている。

を長年の執筆のなかで体得していたことを示すものだろう。吉村はまず、原稿用紙一枚にごく小さな文字で、数枚分の下書きをしてから、清書をしたという。そのために用いるのは細い字が書ける国産メーカーの万年筆でなければならぬ。原稿用紙のマス目を無視して、小さな文字を書き連ねる時、作家の集中力は研ぎ澄まされたものになっていったに違いない。そして清書の段階ではインクの流れのよい硬いペン先から次々とよみなく文字が記されていったことが原稿からうかがえる。吉村が愛用し、今も保存さ

れている万年筆は、特別に高価なもの、きわめて珍しいものではない。文字を記すためにきちんと整備された実用に徹したものが多く、それらの多くは取材のため、資料を求めて幾度となく訪れた長崎のマツヤ万年筆病院で手に入れたものだという。先代の院長（店主）の原康二氏は、控えめながらも万年筆に関しては絶対の自信を持っていた、と吉村は観察している。そしてその技術と態度に信頼を寄せ、アドバイスに従って万年筆を購入している。遺された万年筆のなかで、ひととき目立つのは鮮やかなオレンジ色のパーカー、デュオフォルドのビッグレッドである。万年筆の黄金時代と呼ばれる1920年代に登場した歴史的名品の復刻品である。同じ黒軸も所有していたが、「孤独に徹した」書齋での執筆のなかで、気持ちに変化を与え、アクセントを付け加えるのに、この美しいオレンジ色の万年筆はおおいに貢献したにちがいない。



愛用したパーカー、デュオフォルド(ビッグレッド)



吉村が愛用した万年筆（津村節子氏蔵）
様々な個性がある万年筆を使い分けていた。

Profile

小池 淳一（こいけ じゅんいち）

1963年生まれ。国立歴史民俗博物館教授。専門は民俗学。特に日常生活のなかの文字文化について、書物や筆記具を通して調査研究を進めている。主な著書・論文としては『陰陽道の歴史民俗学的研究』（2011年 角川学芸出版）、「明治末から大正初期の万年筆一販売における位相とその意義」（『国立歴史民俗博物館研究報告』第197集 2016年）、「結節点としての万年筆一筆記具の民俗学へむけて一」（『民具マンスリー』51巻4号 2018年）など。また国立歴史民俗博物館における企画展示「万年筆の生活誌一筆記の近代一」（2016年）の展示代表を務めた。

吉村昭と万年筆

会期：令和2年12月18日(金)

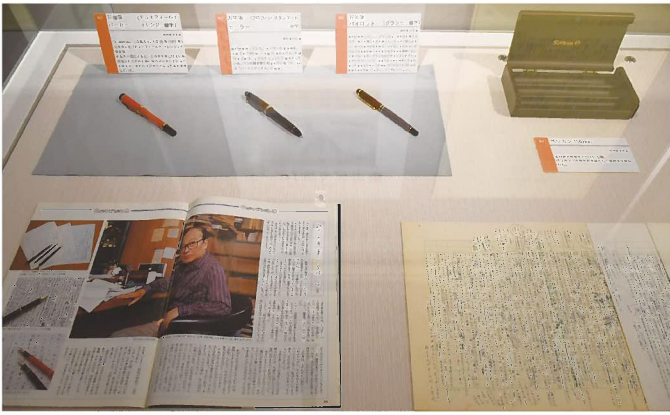
～令和3年3月17日(水)

万年筆で作家体験をしよう

会期：令和2年12月21日(金)

～12月25日(金)

吉村は、万年筆をこよなく愛し、原稿執筆用(清書用)、下書き用、日記用、手紙用など、目的別に使い分けるほどのこだわりを持っていました。今回は、愛用していた万年筆と自筆原稿、万年筆に関する随筆などを紹介しました。また、国立歴史民俗博物館教授、小池淳一氏より「万年筆からみた吉村昭」を寄稿いただきました(2ページ掲載)。



- (前列左より) ●「私と万年筆」(『毎日クラフ・アミューズ』No.8 平成6年9月28日 毎日新聞社)当館蔵
●自筆原稿「秋の旅」草稿 津村節子氏寄託資料
(後列左より) ●パーカー (デュオフォルド、ビッグレッド、細字) 津村節子氏蔵
●セーラー (プロフィットスタンダード、中字) 津村節子氏蔵
●パイロット(グランセ、細字) 津村節子氏蔵
●万年筆を入れていたペリカンの箱 津村節子氏蔵

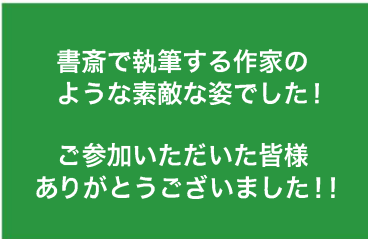
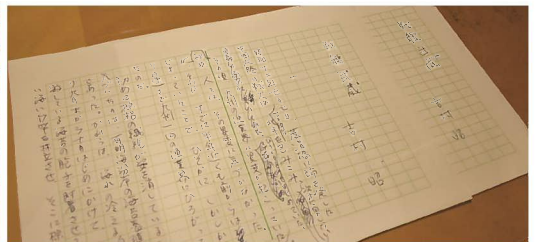
第12回トピック展示に関連して、友の会会員向けのイベントを開催しました。
10名の方にご参加いただき、書齋再現展示室で、吉村氏が使っていたパーカーの万年筆、原稿用紙と同じ製品を使い、模写を楽しんでいただきました。

「戦艦武蔵」と「彰義隊」のうち、好きな作品を選んでいただきましたが、自筆原稿の筆跡をじっくり見ながら、思い思いに模写を楽しむ様子がうかがえました。

書き始める前は緊張されていた方も、模写が終わってから感想を伺うと、「万年筆の書き心地がとても良かった!」と満面の笑顔で嬉しそうに話してくださった姿が印象的でした。

日頃から万年筆を使用されている方も多くいましたが、どなたも、万年筆の書き心地の良さに感激されていました。また、「書き写す体験を通して、小説の楽しさを再発見することにもつながった」「吉村氏書いている姿が目につかぶようだった」などの感想をいただきました。

初開催の体験イベントでしたが、書齋で執筆する吉村氏の姿に思いを馳せ、新たな発見をする機会になり、大変好評でした。今後も「体験」を通して吉村作品に親しむ機会を提供してまいります。



吉村昭が描いた天狗党

「動く牙」と「天狗争乱」福井の旅

会期：令和2年9月18日(金)

～12月16日(水)

平成29年(2017年)に福井県ふるさと文学館と「おしどり文学館協定」を締結し、文学館同士の連携事業を行っています。

今回は福井を舞台とする吉村作品から、「動く牙」(『磔』昭和50年文藝春秋)と『天狗争乱』(平成6年朝日新聞社)を取り上げました。元治元年(1864年)3月に起きた天狗党の乱を題材に、世の変化に取り残された尊王攘夷派を描く歴史小説です。

天狗党の乱とは、水戸藩尊王攘夷派(天狗党)の藤田小四郎が、筑波山で挙兵したことに始まる一連の争乱です。水戸藩家老武田耕雲齋を総大将とする天狗勢は、農民や下級武士を含む千人余りの大集団となつて、尊王攘夷に理解を示す一橋(徳川)慶喜を頼り、朝廷に志を訴えるため京都を目指しました。幕府の追討軍と戦いながら、下野(栃木県)、上野(群馬県)、信濃(長野県)、美濃(岐阜県)を進み、越前(福井県)に至ります。しかし、敦賀の新保にたどり着いた時、初めて敬慕する慶喜が追討軍の総指揮をとっていることを知り、総攻撃を受ける直前に降伏しました。加賀藩から、幕府に引き渡された後の慶応元年(1865年)2月、敦賀の来迎寺境内で、武田、藤田らを含む352名は斬首され、残る約470名も遠島、追放、水戸渡しなどの処分となりました。

吉村は、執筆にあたり、各藩の記録や市

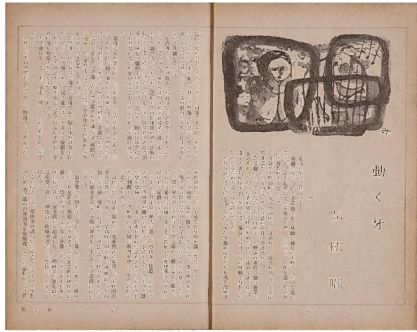
史、研究書など膨大な資料を収集・調査しました。展示では、これら旧蔵書の一部や、自筆取材ノート、自筆原稿などを紹介しました。書き込みや付箋のメモをたどり、資料に基づいて、どのように天狗党を描いたのかをご覧ください。また、敦賀市立博物館提供の武田耕雲齋所用陣羽織や天狗党史跡、大野市提供の大野城などの写真パネルを展示しました。

ここでは、展示内容の一部を報告します。

「動く牙」と「天狗争乱」

尊王攘夷思想は、当時、全国の有能な人々に強烈な影響をあたえたが、それは時間の流れとともに変形し、消えていった。その中で天狗勢のみは、信奉の姿勢をくずさず、それが悲劇となったと言うべきである。

「あとかぎ」(『天狗争乱』)

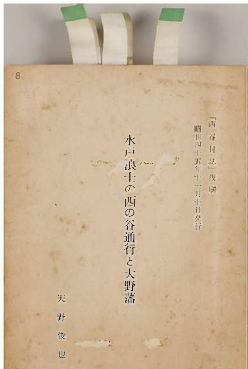


【写真1】「動く牙」
(『別冊文藝春秋』第130号 昭和49年12月 文藝春秋)
昭和40年頃、敦賀で天狗勢が幽閉された練蔵や、武田耕雲齋等墓を見たことが執筆のきっかけだった。(当館蔵)

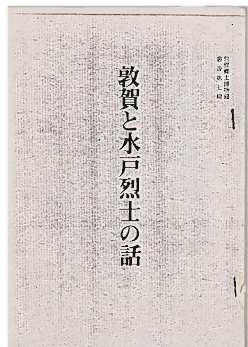
「動く牙」(別冊文藝春秋)第130号 昭和49年12月 文藝春秋は、越前に進入した天狗勢が降伏し、捕らえられ、処刑されるまでを描いた作品です【写真1】。降雪の難所である蠅帽子峠を越え、越前大野藩領に到達する経緯や藩との攻防、天狗勢に対する加賀藩永原甚七郎の温情と、幕府による非情な処分を活写しました。

「動く牙」発表から16年後、吉村は、水戸脱藩士らによる大老井伊直弼の暗殺事件を描く『桜田門外ノ変』(平成2年新潮社)を刊行しました。水戸で興った尊王攘夷思想をより深く理解するためには、事件の4年後に起きた天狗党の乱を書く必要があると考へ「天狗争乱」の執筆に取り組みます。「朝日新聞」(平成4年10月1日～翌年10月9日)連載後、加筆改稿を経て、平成6年に単行本を刊行し、大佛次郎賞を受賞しました。

尊王攘夷思想は激動する時代とともに、急速に変質し、倒幕へと移行しました。「社会思想は時代の変化とともに変貌する宿命をもつ」ことを「意識することなく行動」したことに「天狗勢の悲劇」があるとして、その「悲劇」を描きたかったと述べています(『天狗勢と女』吉村昭歴史小説集第二巻)



【写真2】天野俊也「水戸浪士の西の谷通行と大野藩」
(『西谷村誌』抜刷 昭和45年)
大野での天狗勢を捉えることができた資料。付箋を貼付。(右)付箋箇所の一つ。藩が布川源兵衛を交渉役として派遣した経緯に印を付けている。(津村節子氏寄託資料)



【写真3】石井左近「敦賀と水戸烈士の話」
(昭和46年 敦賀郷土博物館)
八幡神社宮司であった著者を訪ねた際に提供された資料。(右)加賀藩が降伏後の天狗勢に届けた米、漬物、酒、鰯などの数量を確認している。(津村節子氏寄託資料)

「動く牙」文献資料について

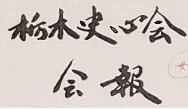
昭和49年秋、吉村は「動く牙」執筆のため、現地調査を行いました。福井県立図書館での資料調査に始まり、大野の蠅帽子峠や、天狗勢が本陣とした杉本弥三右衛門宅のほか、敦賀では、降伏の会議をした新保村の屋敷、劣悪な環境で幽閉された練蔵や、墓を取材しました。

展示では、この旅で調査した資料を取り上げました。天野俊也「水戸浪士の西の谷通行と大野藩」(『西谷村誌』抜刷 昭和45年)には、天狗勢との交渉役となった町年寄布川源兵衛に関する記述に赤線が多く見られます【写真2】。また、石井左近「敦賀と水戸烈士の話」(昭和46年 敦賀郷土博物館)より、降伏後の加賀藩の対応や苛酷な練蔵での幽閉生活、武田金次郎(武田耕雲齋孫)の処分に着目していることを紹介しました【写真3】。

「天狗争乱」文献資料と自筆資料について

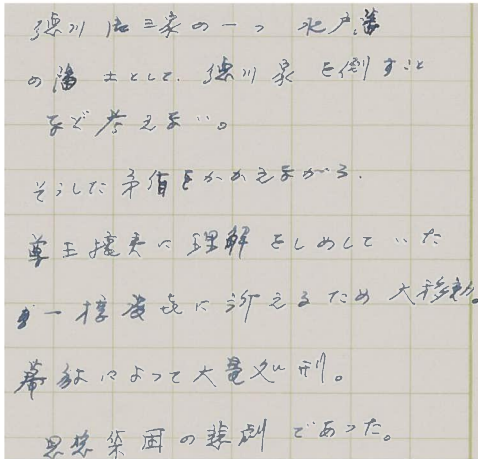
「天狗争乱」執筆時には、天狗勢が通過した各地を徹底取材し、郷土史家や研究者を訪ね、収集した文献の調査を重ねました。

今回は、作品の冒頭で記された天狗勢の田中憲蔵隊による栃木町焼き討ち事件の研究書、稲葉誠太郎『水戸天狗党栃木町焼打事件』（昭和58年 ふろんていあ）を展示しました。また、武田の妻子や、天狗勢と共に旅した女性と赤子の存在を調べた資料に注目しました。関山豊正『元治元年―那珂湊の大戦―』（昭和45年私家版）では、武田の妻子が赤沼で投獄された箇所にも多くの線が引かれ、貼り付けた付箋に「妻子」とメモしていることを紹介しました。さらに、河内八郎「野州における天狗党争乱（続）―元治元年11月の通過をめぐる問題―」（「栃木史



書の顔ぶれをさがしてみた。以下に2点を示す。まず、(2)では、最後の降伏のとき、1人ではあるが、「市毛源七母見恵(みえ)」という名前が記されていることが注目される。(3)は、上州高崎藩兵と交戦した際の「雑記」であるが、2人で、1人は60歳くらいの老母、もう1人は、赤子(赤子)を負った者である。

【写真4】河内八郎「野州における天狗党争乱(続) 一元治元年11月の通過をめぐる問題―」(「栃木史心会会報」昭和61年9月)
(上)表紙「会報」の右上に「女」と書き込みがある。(下)「市毛源七母見恵(みえ)」の名に線を引く。前頁では、女性たちの人数や年齢に線を引き、通過した地名を青色の丸印で囲んでいる。(津村節子氏寄託資料)



【写真5】自筆メモ「天狗争乱」10枚目
(津村節子氏寄託資料)

尊王攘夷の思想を信奉する者も反対する者も、思想からはなれて、釈明の機会を一切あたえずに大量処刑した幕府の残虐さ、その政治態勢が明らかに末期にあるのを強く感じたのである。(「天狗争乱」)

心会会報「昭和61年9月」より、夫と息子が天狗勢に参加した「市毛源七母見恵(みえ)」に関する書き込み箇所をたどり「写真4」。

吉村のもとには、連載中、天狗勢ゆかりの地に暮らす読者や郷土史家から数多くの手紙が届きました。中でも、和田宿を出発した天狗勢が掲げた旗指物のほとんどは「襦袢」だったという伝承を知り、衝撃を受けたと述べています。自筆原稿「読者からの手紙(「史実を歩く」所収平成10年文春新書)の記述をたどり、この情景を文庫刊行時に加筆したことで「小説の密度」が高まったような「満足感をおぼえた」という吉村の創作姿勢を紹介しました。



【写真6】自筆原稿「天狗争乱」(上)(下)
手前が上巻の1ページ目、右奥下巻。
(津村節子氏寄託資料)

敦賀での終息から3年後、元号は、明治に改元されました。自筆メモ「天狗争乱」には、「徳川御三家の一つ水戸藩の藩士として、徳川家を倒すことなど考えない。」とあり、「そうした矛盾をかかえながら」慶喜に「訴えるため大移動。幕府によって大量処刑。思想集団の悲劇であった。」と記しています【写真5】。吉村は、連載前のインタビューで「特定の人物」ではなく「天狗勢という群れ」を主人公に描くと語りました(「朝日新聞」平成6年10月1日)。冷徹に行軍を記すことで、千人余りからなる一つの集団を浮き彫りにしています。全900枚以上の自筆原稿は、上下巻に製本し、書齋で保管していました【写真6】。



見える思い出深いだけ桜をデザインしました(左)。もう一点は、吉村愛用の靴や万年筆、ノートをモチーフに取材の旅を表しました(右)。アンケートに寄せられたご要望を踏まえ、今後両館で共に取り組んでいきます。

観覧アンケートに回答いただいた方へ、おしどり文学館グッズをプレゼントしました。季節毎に花が咲くと私は庭に出て枝を見上げたり、しゃがんだりして花を見るのが楽しみで、そんな私を書齋の窓から見ている夫が、「花の好きな女だなあ」と言っていた。その口調は果れ気味ではあるが、好ましく思っているように聞えた。夫の書齋は遺したので、その窓の下の植込みだけは残っている。大輪の白椿、しゃくなげ、夫の好きな紅梅、そして夫が亡くなる前年に二人で買いに行ったしだれ桜。

津村節子「紅色のあじさい」
『夫婦の散歩道』平成24年 河出書房新社
協定を締結している福井県ふるさと文学館は「吉村昭と匠」(会期・令和2年11月23日〜12月23日)を開催し、『雪の花』(昭和63年新潮文庫)や『冬の鷹』(昭和49年毎日新聞社)を紹介しました。また、会期中、福井県ふるさと文学館は一筆箋を、当館は活版印刷で製作したコースターをプレゼントしました。津村節子氏の随筆より、書齋の窓から

令和2年度企画展「戦後75年 戦史の証言者たち」 —吉村昭が記録した戦争体験者の声—

今年度第一回目の企画展は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、ウェブ展示という形式で実施しました。展覧会の特設サイトを開設し、戦史小説に関する自筆原稿や取材ノートを解説文とともに掲載しています。初めての試みでしたが、多くの方にご覧いただき、国内を中心に、アメリカ、イギリス、ロシア、ベトナム、中国、台湾などからもアクセスいただきました。また、アンケートのコメント欄には、

「コロナ禍の中で、持病がある高齢者にとつて、県外の外出はままなりません。このような展示方法で楽しませていただく大変ありがたいです」(70代以上・男性)などの感想をいただきました。展覧会の内容についても、「戦争というものをどう子供たちに伝えていくか、今回の企画展でヒントをもらった気がします」(30代・女性)、「戦争や死を知ることが大切で、それが平和や

命を大切に繋がることと教えていただいている点と、忘れてはならないと企画展を機会に改めて感じました」(60代・男性)などの声をお寄せいただきました。

戦争を知らない世代が増え続けるなかで企画した展示でしたが、幅広い世代や地域の方からコメントをいただき、改めてこのテーマに対する関心の高さがうかがえました。

今回の企画展は、ウェブサイトのみの開催となりましたが、今後もさまざまな企画を通して吉村作品の魅力発信していきたいと思えます。

(学芸員 鈴木志乃)



戦後75年 戦史の証言者たち 吉村昭

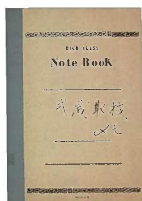
検索

常時公開中!



- 展示構成**
- はじめに 戦争を書くということ
 - 第1章 艦船の証言者たち
 - 第2章 戦闘機の証言者たち
 - 第3章 沖縄戦の証言者たち
 - 第4章 それぞれの戦い
 - 第5章 吉村昭の証言(※図録のみ)
- おわりに 読み継がれる作品

展覧会オリジナルグッズ



「戦艦武蔵」取材ノート
250円(税込み)・B6



マスキングテープ
300円(税込み)



展覧会図録
410円(税込み)
A5・64頁
オールカラー

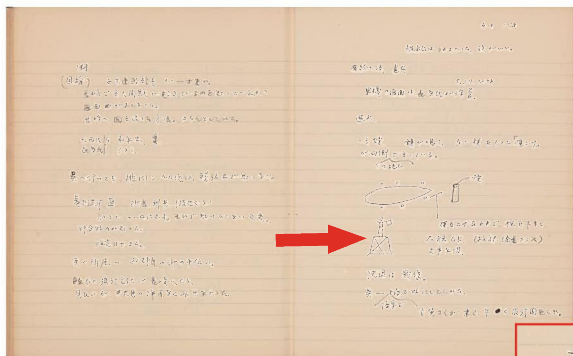
※販売場所は、ゆいの森1階総合カウンターまたは郵送販売。詳しくは展示サイトをご確認ください。

学芸員ノート3

今回、展覧会のオリジナルグッズとして「ノート」と「マスキングテープ」を製作しました。この図案は、吉村が「戦艦武蔵」の取材ノートに書き記した図が元になっています。吉村の取材ノートには、証言だけでなく、絵図、図解、地図、見取り図なども書き込まれています。今回使用した図は、戦艦「武蔵」の進水時の様子を聞き取った箇所に記されていたものです。この説明として、

進水/白い旗をもった「旗ぶり」が、両側の地上で立っている。/旗を上げたまま、旗を下すと、左舷OK。(技師、係長クラス) 大事な役

とメモされています。グッズをお買求めの際には、是非注目してみてください。



自筆ノート「武蔵取材メモ」
津村節子氏蔵

企画展のお知らせ

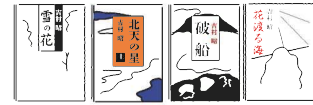
令和2年度企画展 「吉村昭 医学小説—伝染病予防に奔走した人々—」

令和3年3月24日(水)～5月23日(日)

医学に関する作品に焦点を当て、「雪の花」「北天の星」「破船」「花渡る海」など天然痘について描いた作品をご紹介します。中でも、江戸時代に死病と呼ばれ恐れられた伝染病、天然痘の予防に携わった笠原良策・中川五郎治・久蔵を取り上げます。彼らの生涯を、吉村がどのように迫り描いたのか、旧蔵書、自筆資料、調査・取材資料からその軌跡をたどります。

- 開館時間／9:30～17:00 (常設展示は20:30まで)
- 休館日／毎月第3木曜日・特別整理期間・保守点検日ほか
- 入館料／無料
- 会場／ゆいの森あらかわ3階 企画展示室

※新型コロナウイルス感染症拡大状況により、開催日時等を変更する可能性があります。

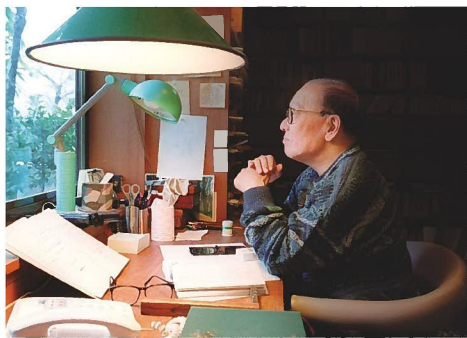


企画展公式サイト



Vol.16

今号の表紙



写真提供 読売新聞社

この写真は、平成12年(2000年)、吉村が73歳の時に撮影されたものです。小説の構想を練っているのでしょうか。書斎の窓から庭を見つめています。昨年12月に開催した友の会イベント「万年筆で作家体験をしよう」(p.3参照)にご参加いただいた皆様にも、同じポーズで撮影にご協力いただきました。皆様とても絵になっています(裏表紙参照)。



便利になったよ、友の会

吉村昭記念文学館では、友の会会員を募集しています！今年新たに、郵便局ATMで使える払込票による納付方法を追加しました。これまでより、会費のお支払いが便利になりました。

会員になると限定グッズやイベント優先募集等の特典があります！是非、ご入会ください！

【会員区分】

個人会員(1年) 1,000円
個人会員(3年) 2,500円
法人会員 3,000円
賛助会員 1口 2,000円から

卓上カレンダーがもらえる！
2021年のテーマは
“食”



入会申込はHPから
もできます。

詳しくはHPを
チェック！



編集後記

巻頭コラムは、国立歴史民俗博物館教授の小池淳一氏に寄稿いただきました。小池氏は、長年、吉村の万年筆に対するこだわりに関心をお持ちです。解説いただいた吉村ならではの使い分けや動かし方の特徴、万年筆への深い愛着を知った上で自筆原稿を鑑賞する時、味わいもしみじみと深まるように感じられました。吉村が「アリンコのような字」と例えた草稿(複製)と、デューフォールド(複製)は、常設展示でご覧いただけます。今号の開催報告では、証言を書き留めた自筆ノート「武蔵取材メモ」や、「動く牙」と「天狗争乱」執筆時の文献資料を紹介しました。展示をご覧になった方々は、戦争を語り継ぐことの大切さや、時代と人間の在り様、その歴史の重みについて思いを巡らせていることが窺えました。吉村は講演で次のように語っています。

戦史小説から歴史小説へと移った私の仕事では、事実を動かさずに調べることの方法や材料は、生きている人の証言から、文献や現地調査へと少し変わっているようですが、ともに同じやり方だと思っています。戦史小説をふくめて歴史小説を書いてきた私の思うことは、時代は変わっても人間は同じことをするということです。(略)

歴史を考えることは、現代を考えることでもあります。その流れは同一で、これによって、自分の生きている現代を見つめ、将来を予測することもできると思います。

昭和を目いっぱい生きてきたこれが私の感想です。^{*}創作への真摯な姿勢に貫かれた言葉は、多くの示唆を与えているように思われます。お知らせの通り、3月24日から開催の企画展では、伝染病予防に奔走した人物を取り上げます。新型コロナウイルス感染症拡大防止対策に取り組み、皆様のご来館をお待ちしています。

訃報

柏原成光氏

元筑摩書房代表取締役で、吉村氏とも懇意にしていた柏原成光氏が令和2年9月3日に逝去されました。区が製作した証言映像にご出演いただきました。

ここに、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

*「昭和・戦争・人間」(『白い道』平成22年 岩波書店)



万年筆で作家体験

イベント風景

吉村昭記念文学館ニュース 万年筆の旅 vol.16

令和3年3月26日発行

- 編集・発行 / 荒川区 登録番号 (02) 0089号
- 題 字 / 津村節子氏 ■ 切り絵 / 山崎達郎氏
- 問合せ / **吉村昭記念文学館**
〒116-0002 東京都荒川区荒川2-50-1 ゆいの森あらかわ内
TEL : 03-3891-4349 FAX : 03-3802-4350
URL : <https://www.yoshimurabungakukan.city.arakawa.tokyo.jp/>
【開館時間】 9時30分～20時30分 【入館料】 無料
【休館日】 毎月第3木曜日・特別整理期間・保守点検日・年末年始他
- アクセス
・都電荒川線(東京さくらトラム)「荒川二丁目(ゆいの森あらかわ前)」下車……………徒歩1分
・東京メトロ千代田線「町屋駅」2番出口、京成線「町屋駅」下車……………徒歩8分
・コミュニティバス「さくら」ゆいの森あらかわ下車(土曜、日曜、祝日のみ)
・東京駅から(地下連絡通路経由)東京メトロ千代田線「大手町駅」→「町屋駅」(乗車13分)



*イベント等の最新スケジュールは当館ホームページからご確認ください。